

低温・凍霜害に対する農作物の技術対策について

平成31年4月5日
農業技術課

1 水 稲(育苗)

- (1) これから5月下旬にかけては、急激な温度変化により、ムレ苗等の障害が発生しやすい時期である。
- (2) 低温が予想される場合は、早めにハウスやトンネルの被覆材を閉め、併せて保温資材で被覆する。
- (3) 折衷トンネル苗代やプール育苗では、箱上まで湛水する。
- (4) 降霜後は晴天となり、育苗施設内の温度が急上昇することが多いので、早朝から換気を行い、苗の焼けやムレを防止する。
- (5) ムレ苗の発生を確認した際は、遮光して葉からの蒸散を抑える。

2 麦 類

- (1) 本年3月末現在の麦類の生育進度は平年より進んでいる。また、昨秋の播種が順調に行われ、その後も暖冬傾向に経過したことから、生育量がやや過剰傾向である。
- (2) 低温の被害を受けた場合は、その程度を確認し、被害穂率が高い場合にはその後の追肥量を減じるなどの調整を行う。
- (3) 低温により発生した不稔穎花は、赤かび病の発生源になるため、開花期の赤かび病防除を行う。

3 果 樹

- (1) 週間天気予報から最低気温情報を確認し、表1に示す生育ステージ別の危険温度を勘案し、燃焼法等の凍霜害対策を準備する。樹種ごと、生育ステージごとに凍霜害発生危険温度は異なり、幼果は高目の温度でも凍霜害が発生するので注意する。
- (2) 防霜ファン設置園では、ファンの動作を確認し、対象樹種の展葉後にファン稼働開始温度を2℃、作動停止温度を6℃に設定する。なお、降雪時には防霜ファンを稼働しない。
- (3) 防霜ファンのない園では、燃焼法により対策を講じる。
- (4) 温度低下が著しい場合には、防霜ファン導入園においても燃焼法を併用する。防霜ファンと燃焼法を併用する場合でも、10a当たりの火点設置数は通常の燃焼法と同数とし、風上側となる防霜ファン側ほど密に配置する。
- (5) 草生栽培園では、こまめに草刈りを行い、草丈を短くしておく。
- (6) 敷きわら等のマルチは凍霜害を助長するため、遅霜のおそれがなくなった時期を見はからって実施する。

表1 果樹の凍霜害危険温度(30分間、℃ 福島県農業総合センター果樹研究所)

樹 種	生 育 段 階		
	色づいた蕾	開花中	小さい幼果
りんご ^{注)}	-2.0	-1.5	-1.7
もも ^{注)}	-2.3	-2.3	-1.1
日本なし ^{注)}	-2.5	-2.0	-1.3
おうとう	-2.2	-2.2	-1.1
西洋なし	-3.9	-2.2	-1.1
うめ	-3.9	-2.2	-1.1
あんず	-3.9	-2.2	-0.5
すもも	-5.0	-2.7	-1.1
日本すもも	-3.3	-2.7	-1.1
ぶどう	-1.1	-0.5	-0.5
くるみ	-1.1	-1.1	-1.1

注) りんご、もも、日本なしは、1時間遭遇での危険温度

参考：果樹の凍霜害対策のための温度指標

(平成22年 福島県農業総合センター果樹研究所) (単位 °C)

りんご (ふじ)	発育ステージ	発芽直前	発芽期	展葉初期	花蕾露出期	花蕾着色期	開花始	満開期	落花期
	安全限界温度	-3.5	-2.2	-2.2	-2.1	-2.0	-1.5	-1.5	-1.7
なし (幸水)	発育ステージ	発芽期	花蕾露出期	花蕾露出始期	花弁白色期	開花直前	満開期	幼果期	
	安全限界温度	-3.3	-2.5	-2.5	-2.5	-2.0	-1.3	-1.3	
もも (あかつき)	発育ステージ	花蕾着色期	花弁露出始期	花弁露出期	満開期	落花期	幼果期		
	安全限界温度	-2.3	-2.3	-2.3	-2.3	-1.9	-1.9		
おうとう	発育ステージ	花蕾露出期	花弁露出始期	開花直前	満開期	落花直後			
	安全限界温度	-2.2	-1.7	-1.7	-1.5	-1.1			
ぶどう	発育ステージ	発芽期	1葉期	2葉期	3葉期	4葉期			
	安全限界温度	-3.9	-2.8	-2.2	-2.2	-2.2			

注) 表中の温度は植物体温度であり、気温ではないので注意する。

なお、風のない夜間では、植物体温度は気温よりも数度低くなるとされる。

4 野菜

(1) 苗床の管理

ア 育苗中の「ずらし」や定植数日前からの順化を徹底し、健苗を育成するように努める。

イ はくさい、ブロッコリー、カリフラワー、セルリー等の低温感応で花芽分化する品目は、それぞれ最低夜温を下回らないよう努める。

ウ 暖房設備がない施設では、夕方早めに換気口等を閉め、二重カーテン等により保温に努める。

エ 早朝低温であっても、日中晴れた場合は施設内や被覆資材下の温度が急上昇して高温障害が発生するおそれがあるため、早めの換気を行う。

(2) 定植時の管理

ア 定植予定日の翌朝に低温が予想される場合には、定植を延期する。

イ 定植時に苗箱やポットにかん水を行う場合、水温に注意し、根鉢を冷やさないようにする。定植後のかん注には過リン酸石灰1,000倍液など、薄いリン酸溶液を用い活着を促す。

ウ 早い活着を促すため、定植作業はできるだけ午前中に済ませる。

エ 葉野菜類でセル苗の定植を行う場合、浅植えにならないように注意する。

オ トンネル栽培のすいかでは、定植当日の摘芯を避け、定植数日前か活着後に行う。定植位置をトンネル中央に寄せ、低温の影響を緩和する。

カ ジュース用トマトの改良マルチ栽培では、所定の植え付け深さを確保する。

(3) 露地本ば管理

ア 夜間の放射冷却が強い場合、農業用ポリエチレンシートなどのトンネル1枚被覆のみでは、十分な保温効果が得られないため、早めに保温資材を二重にかける。

イ 地表面が -1°C 程度の低温に対しては、べたがけ資材の被覆が有効である。凍霜害に遭いやすい品目には緊急対策として利用する。ただし、作物がべたがけ資材に接している部位は、低温障害を受けやすいので留意する。

ウ アスパラガスで翌朝に凍霜害が予想される場合、通常の出荷規格に満たない若茎であっても前日に収穫し出荷するか、事前に出荷団体等と検討を行う。

5 花き

(1) りんどう、しゃくやく、シンテツポウユリ等で萌芽が始まっている据え置きほ場では、べたがけ資材、ビニールトンネル、こも等の保温資材で被覆し温度確保に努める。

(2) しゃくやくは、萌芽後 -5°C 以下、また、出蕾以降は 0°C 以下、シンテツポウユリ等の据置株は、 $-3\sim-4^{\circ}\text{C}$ 以下、リンドウは -5°C の低温にならないよう管理する。

(3) きくは、大苗で定植した場合やマルチ栽培、定植直後のものは、低温の被害を受けやすいため必ず保温対策を実施する。

(4) 乾燥防止と防草を兼ねた敷きわらは凍霜害を助長するため、遅霜のおそれなくなった時期を見はからって実施する。

6 茶

(1) 寒冷しゃ等を被覆し、茶樹を保護する。

(2) 防霜ファンが利用できる場所では、防霜ファンを利用する。